

化粧に用いる金属製の菊花形の皿

古賀 真木子

1 はじめに

ここで取り上げる遺物は、銀、青銅または真鍮で作られた菊花形を呈する皿で、坏・高台・坏と高台をつなぐ鋳の3つの部品で組み立てられている。この皿に興味を持ったのは、昭和61(1987)年に山口市教育委員会が発掘調査を実施した中世墓群の瑠璃光寺跡遺跡¹⁾の出土品を見てからである。土葬の第55号墓には銅製の菊花形の皿と鉄製の毛抜が副葬され、化粧道具のセットの一部となっていた。被葬者は長櫃と思われる家財道具を棺に転用して葬られ、被葬者の階層と共に愛着の程が偲ばれる。当時これを紅皿として報告したがその後、同型のものが齒黒入・抹裙(頬紅)入・水入と用途が決められている例²⁾や、紅皿・お齒黒皿として使用された例を知り、今一度考えてみようと思う。

菊花形の皿は室町時代に多くみられ、最も保存状態が良いのは和歌山県新宮市に所在する熊野速玉大社に明德元(1390)年奉納と伝えられ御神宝にされているものである³⁾。12社からなる大社と1つの摂社に化粧道具一式の内容品として3個1組でそれぞれ蒔絵の手箱に収められ、菊花形の皿は計39点(内8点は散逸)伝えられている。また、静岡県三島市に所在する三嶋大社には13世紀初めに奉納されたとの伝来をもつ蒔絵手箱に銀製の菊花形の皿が1点⁴⁾ある。室町時代の遺物とは器形もかなり異なり同列に扱うのは危険であるが、化粧用具としての菊花形の皿の出現の契機となったのは事実であろう。出土例は、文明3(1471)年~天正元(1573)年に存続した福井市一乗谷朝倉氏遺跡で現在までのところ20点余り見つかっているが他の遺跡では少なく、化粧道具の良好なセット関係がみられるところは稀である。

本考では、菊花形の皿を軸に中世の化粧道具から化粧を行う人々の階層や性別を捉えて、できる限り当時の人々の生活の復原を試み、平安時代以前あるいは江戸時代以降といかにつながるか追ってみたい。そのため、化粧に使われる遺物のうち祭祀的色彩の強い埋納鏡や水中鏡、井戸に投棄された櫛などは原則として除外して考えてみた。

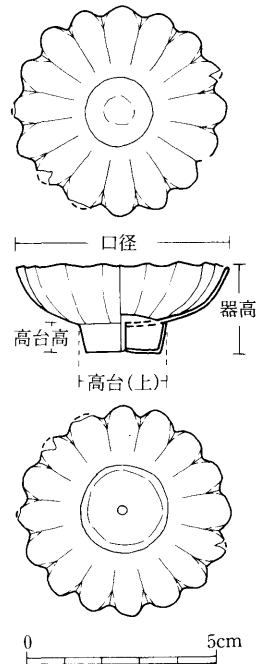


Fig. 95 瑠璃光寺跡遺跡出土の銅製菊花皿
(山口市教育委員会所蔵)

2 形式分類

菊花形の皿は先に述べたように、お歯黒・頬紅・口紅・水入のいずれかの用途が考えられるが、付着物のないものは用途の確定が難しいため一括して分類を行った。分類の要素は、坏の花弁数の変化、見込みの鋳の花央表現の変化、高台の形、口径・器高・高台の高さの法量比、花弁先端の形の5点が挙げられる。

(1) 坏の花弁数の変化

三嶋大社所蔵の資料は花弁が32弁で上下2段になっており、おそらく複弁を表現したものであろう。これ以外は全て単弁である。復原分を含んだ出土遺物の花弁数は、22または21弁1例、20弁2例、18・17弁各1例、16弁8例、14・12弁各1例である。一乗谷朝倉氏遺跡では、14世紀末～15世紀初めと考えられる一乗谷の町ができる以前の館または屋敷地のI期整地層から出土した54次調査の815 (Tab. 6-5。以下Tab. 6に対応。)が、損傷が著しくはっきりしないが22または21弁、46次調査出土の⁶⁾167 (6)が20弁、II期の文明年間(1470年代)の遺構面出土と考えられる第50次調査の252 (8)が17弁である。15世紀末を遡る堺環濠都市遺跡 (SKT-234地点) の柳之町出土遺物 (26) は18弁で、古いものほど花

Tab. 6 金属製の菊花形皿一覧表

No	伝世品・出土遺物	口径	器高	高台径・高	花弁	鋳の格子	鍍金	用途	分類	法量はcm、() は復原値	
										時 期	
1	三嶋大社 梅蒔絵手箱				32枚	小突起	銀製			鎌倉時代初期	
2	熊野速玉大社若宮殿 No.1	5.2	1.6	0.4・0.4	16	0.5mm間隔	銀製	歯黒	II・III	明徳元年(1390)年奉納	
3	〃 No.2	5.0	1.5	0.6・0.2	16	1mm間隔	銀製	頬紅	I類		
4	〃 No.3	5.0	1.5	0.6・0.2	16	1mm間隔	銀製	水	I類		
5	一乗谷朝倉氏遺跡 54次 815	(5.2)	1.5	1.7・0.2	(22)				I類	14世紀末～15世紀初、I期	
6	〃 46次 167	5.0	1.8	1.8・0.4	20	2mm間隔	有	紅	I類		
7	〃 35次 75	5.8	2.6	2.3・0.6	(20)	格子あり		紅	I類		
8	〃 50次 252	3.8	1.4	1.4・0.3	17	3mm間隔	有		I類		
9	〃 51次 23458				17				I類		
10	〃 40次 33	4.9	2.0	2.1・0.4	16	1.5mm間隔			II類		
11	〃 40次 34	5.3	2.4	2.4・0.9	14	3mm間隔	有	歯黒	III類		
12	〃 40次 35	5.1	2.4	2.1・0.75	16	2mm間隔		紅	II類		
13	〃 40次 36	4.1	1.4	1.7・0.3	16	無文	有	歯黒	I類		
14	〃 40次 46156				16				II類		
15	〃 52次 83	5.5	3.0	1.9・0.5	16	2mm間隔		紅	II類		
16	〃 29次				16			歯黒	II類		
17	〃 49次 23	5.2	—	高台欠失	(16)	1.5mm間隔			III類		
18	〃 36次 22991	4.0	1.8	1.9・0.6	12	1mm間隔	有	歯黒	III類		
19	〃 36次 22216										
20	〃 36次 36429										
21	〃 43次 227	5.0	2.3	1.7・0.6							
22	〃 43次 228	4.1	—	高台欠失							
23	〃 42次 50	5.3	—	高台欠失							
24	〃 75次										
25	小谷城跡	4.4	2.0	1.5・0.5	16			歯黒	I類		15世紀末(天正以前)
26	堺環濠都市遺跡 柳之町	4.9	1.9	1.85・0.3	(18)		有		I類		16世紀半
27	〃 SKT61地点	5.7	3.1	1.8・0.8							16世紀末
28	〃 SKT289地点	5.6	2.5	2.4・0.75	16						
29	瑠璃光寺跡遺跡 第55号墓	5.6	3.0	2.3・0.9	16		有		II類	16世紀前葉～後葉	

弁が多いと考えられる。16弁のものが半数を越えることから、当初の32弁から「菊の御紋」に代表される一般的な菊花の16弁へと花卉数は減少したのであろう。14世紀末の製作と考えられる熊野速玉大社の資料が全て16弁であることから、32弁から半数の16弁に直に変化する場合と、21…20…18…17…16と順次変化する2つの流れが考えられる。花卉数の少ない14弁の一乗谷朝倉氏遺跡第40次調査出土の⁹⁾34(11)と12弁の同第36次調査出土のNo.22991¹⁰⁾(18)は、器高に対する高台の高さの比が他の出土遺物と大きく異なり、同列では捉えられず1グループをなすと考えられる。

ここで、菊花形の皿の製作手順を考えると、坯は円形に切り抜いた金属板または碗形に鑄造したものを鍛いて花形にし、外面からヘラ状の工具を押し当てて弁間の筋を表現する。花卉数が多い分手間がかかる。簡略化は当然の流れであり、また、円形の銅板に花卉を割り付ける場合に16は最も容易な数である。一方、これらの遺物よりやや新しい16世紀後半の作と考えられる愛媛県大三島町の大山祇神社所蔵の菊枝鳥蒔絵手箱は、蓋表に14～16弁、蓋裏に17、18弁で菊花の文様が描かれ、同一図案内でも強い規制力はみられない。同様に菊花形の皿においてもある時期では花卉数を限定する規制は強くなかったことも考えられる。事実、一乗谷朝倉氏遺跡第40次調査出土の¹²⁾33(10)は坯が16弁、高台も菊花形を呈し17弁で上下の弁数は必ずしも一致していない。

(2) 見込みの鋳の花央表現の変化

見込みの盛り上がりは、菊花のオシベを表現するだけでなく、坯と高台とを繋ぐ鋳となっている。三嶋大社所蔵の資料は、鋳の表面に円形の小突起を作り出し写実的である。熊野速玉大社若宮殿所蔵の資料は1点が0.5mm間隔の細かい格子(2)、2点が1mm間隔のやや細かい格子(3・4)で表現されている。一乗谷朝倉氏遺跡の出土遺物は錆や付着物のために判明しないものもあるが1mm間隔(18)、1.5mm間隔(10・17)、2mm間隔(6・12・15)、3mm間隔(8・11)の格子で表現され、40次調査出土の¹³⁾36(13)のように明らかに無文のものもある。写実的な円形の突起→細かい格子→粗い格子→無文へと変化したことがうかがえる。ただ、三嶋大社所蔵の資料と熊野速玉大社所蔵の資料の間には各々の社伝によると150年以上の時代の開きがあり、この間に突起ではなく魚々子地風に陰刻される表現方法の存在した可能性も考えられる。

(3) 高台の形

高台の形は、熊野速玉大社所蔵の資料2点(3・4)が花のガクを模して星形に切り抜いたドーム状の形、熊野速玉大社の資料1点(2)と一乗谷朝倉氏遺跡の第40次調査出土の

33 (10) が底のある円筒形を細工した花形、他が一般的な底のある円筒形と3種類がある。円筒形の高台は、断面形が台形で上部の幅の狭いもの、断面形が長方形で上下の径に差がないもの、断面形が逆台形で接地する底面径の方が小さいものがある。見込みの鋳の格子目の変化から見て断面が長方形から逆台形に変化すると思われる。これは実用的な安定の良いものから、不安定だが見た目の良いものへの変化と考えられる。この逆台形を呈する中に鋳の先端が十分に叩かれずに突出したままのもの (29) もあり、非実用性が明らかであろう。また、見込みの鋳に格子をもつ遺物の中に断面台形のものがあるが、完形の出土例が少なくはっきりしない。

(4) 口径・器高・高台の径・高台の高さの法量比

法量による分類は、口径・器高・高台の底径・高台の高さそれぞれの相関関係を求めてみた。その結果、器高に対する高台の高さの比、口径に対する高台上部の径の比の2つが分類の基準として有力ではないかと考えられた。ただし、熊野速玉大社の資料3点の数値はおおよそのものでしかない。

まず、器高に対する高台の高さの比は、Fig. 95とTab. 6に示した。2つの図表の番号は対応している。熊野速玉大社の資料では8.0 (3)・7.5 (4)・4.0 (2)の値、一乗谷朝倉氏遺跡の出土遺物は10点中6.0以上の数値を示すもの1点(10)、3.0以下の数値を示すもの2点(11・18)とややばらつきを見せるが、おおむねの傾向としては、次第に器高に占め

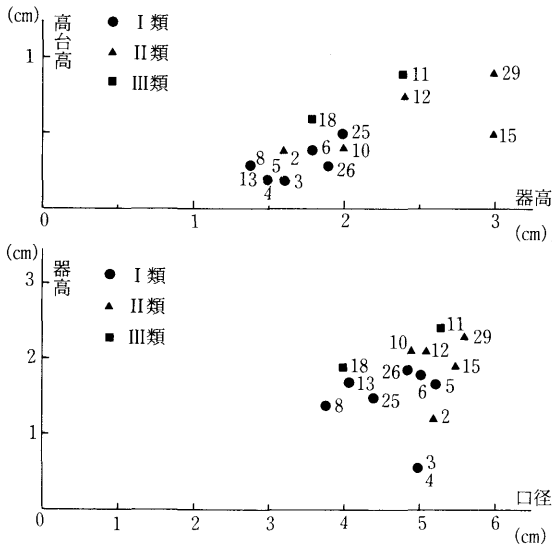


Fig. 96 菊花形皿の法量分布

る高台の高さの割合が高くなり数値は小さくなっていく。また、先に花卉数の変化の項でも述べたように、15弁以下の一乗谷朝倉氏遺跡の40次調査出土の34(11)、同36次調査出土の22991(18)はいずれも器高に対し高台が高く、グループ分けが可能である。

次に、口径に対する高台上部の径の比を求めると、熊野速玉大社の資料は8.3 (3・4)と4.3 (2)、花卉20弁の一乗谷朝倉氏遺跡第46次調査出土の167(6)が2.8が、花卉17弁の同第50次調査出土の252(8)が2.7、堺環濠都市遺跡の柳之町出土遺物(26)が2.6、一乗谷朝倉氏遺跡第40次調査出土の

36 (13) が2.4と花卉数が減るに従い数値が小さくなり、次第に口径に対し高台径が大きくなる傾向がうかがえるが、高台の高さは0.3~0.5cmで比較的低いまま移行する。花卉数が当初から16枚のものは一乗谷朝倉氏遺跡第40次調査出土の33 (10) が2.3、同第52次調査出土の¹⁴⁾83 (15) が2.9、瑠璃光寺跡遺跡出土遺物 (29) が2.4の値を示し、花卉15枚以下のものは一乗谷朝倉氏遺跡第36次調査出土の22991 (18) が2.1、同第40次調査出土の34 (11) が2.2となり、この両者は口径に対する高台径の比が時期によって変化せず、高台の高さは0.4~0.9cmで高い傾向にある。

(5) 花卉先端の形

花卉先端はカーブを描き丸いものと、ほぼ直線的なものがある。カーブを描くものの平面形は花形を呈し、直線的なものは円形を呈する。この違いは成形時に花卉間の筋を表現する工具を押し当てる強さに関連し、強ければ花形に弱ければ円に近くなる。花卉が22弁の一乗谷朝倉氏遺跡第54次調査出土の815から同第40次調査出土の36にむけて、時代が下るにつれ花卉のカーブはきつくなる。また、最も直線的なのは滋賀県湖北町に所在する小谷城跡出土の¹⁵⁾遺物 (25) である。小谷城は大永4 (1524)年~天正元 (1573)年に浅井氏が3代にわたり本拠とした城である。先の大山祇神社所蔵の手箱を再び参考にすると、蓋表には丸味を帯びた花らしい形で描かれているが、蓋裏には円を放射状の線で区切っただけの形で描かれ、花卉数同様に強い規則性はみられない。この考えは菊花形の皿にも反映されているかもしれない。

以上5点をまとめるとFig. 96に示したように、菊花形の皿は大きく3つのグループに分けられる。I類は三嶋大社所蔵の資料の系統を引き、花卉数が多く22弁から16弁へ順次変化し、坏と高台の法量比は熊野速玉大社所蔵の資料No.2・No.3の系統を引く高台の低いグループで、花卉が17弁以上ものには見込みの鋳に格子目が刻まれる。花卉数が多いほど花卉先端のカーブは緩やかだが、16世紀後半になるとただの円に近い崩れた形 (25) も現れる。II類は熊野速玉大社所蔵のNo.1の系統を引くもので、高台が高く、最初から花卉は16枚に限られる。III類は同様に高台は高いが、花卉が15枚以下のものである。II類およびIII類もI類同様に、見込みの鋳に格子が刻まれるものから無文へと変化すると思われ、その画期は一乗谷朝倉氏遺跡の遺物からみて15世紀末~16世紀初めの頃と思われる。また、同時に見込みの格子が消滅するやや前の15世紀末頃から高台の逆台形化が始まると思われる。

ところで、口径による時期差はみられなかった。また、I類は紅とお歯黒両方の付着が認められ、II類は4個中2個 (12・15) に紅の付着が、III類は2個共 (11・18) にお歯黒

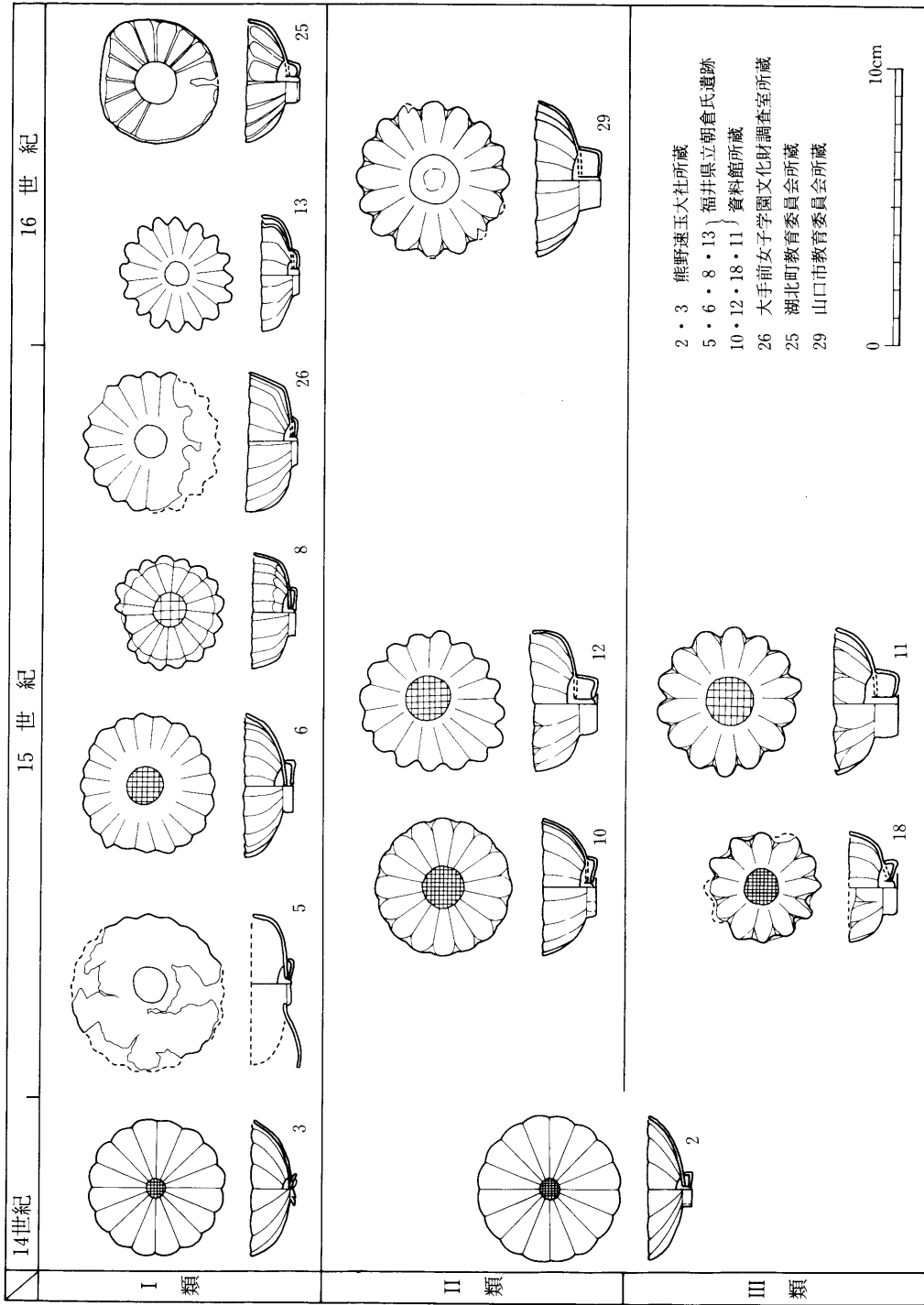


Fig. 97 菊花形皿の変遷

の付着が認められる。II類は紅用にIII類はお歯黒用にと、目的が比較的はつきりしていたのかもしれない。頬紅の素材が何かわからなかったので頬紅と口紅の識別は全くできず、混同している危険性もあるが、菊花形の皿は少なくともお歯黒や紅を入れていたことが証明でき、器形による使い分けも意識されていたと考えられる。

3 分布・出土遺構からみた所有者層

確認しえた資料は出土遺物が4遺跡25点、伝世品が2件32点にすぎず、遺漏が多いと思われるが、とりあえず出土地の検討を行ってみたい。一乗谷朝倉氏遺跡では13地点から20点が出土している。上級武士の屋敷が集中する平井地区(朝倉館の川向い)で2点、寺院・武家屋敷・町屋の集中する赤淵・奥真野・吉野本地区(平井地区の北東)で大規模な屋敷地と推定される所を中心に10点、武家屋敷と町屋群の混在する下城戸付付近で3点検出されている¹⁶⁾。明確な遺構から検出できた例は少ないが、武家屋敷が多く存在したII期に圧倒的に多く、城下に町屋が増加し、武家が再び各地の城へ移るIII期には減少していく。小谷城跡は、大広間跡から1点出土し、また口径8.2cmの大形の輪花の製品が清水谷から見ついている。地頭職の家臣団の墓地と考えられる瑠璃光寺跡遺跡では、比較的厚葬と推定できる墓から1点出土している。以上のことから、菊花形の皿は武士階層に関連する遺跡から発見され、所有者を推定する大きな手掛かりとなる。また、熊野速玉大社の所蔵品は、足利義満が単独で、あるいは足利義満を中心に禁裡(天皇)・仙洞御所(上皇)・有力守護が奉納したと伝えられ¹⁷⁾、公家もまた所有者層に含められるかもしれない。ところで、堺環濠都市遺跡でも3点見ついているが、遺構に伴っておらず所有者ははつきりしない。これらは一時滞在の武家や公家もたらしただけでなく、富を蓄えた有力商人が持っていたと考えておきたい。つまり、ある程度以上の武家を中心に・公家・有力商人などの上層の階級の人々が所有していたと考えられる。伝世品は銀で作られ、出土遺物の大部分に鍍金が施されていることから裏づけられよう。

熊野速玉大社の所蔵品が京都から施入されたことを考えると、本来京都に多く存在していたと考えられる。けれども、度重なる戦乱で破損、消失したのか、平安京内での出土例を確認することができず、公家の使用の可能性は薄いかもしれない。また、現在の分布が京都を中心に半径200km以内に大部分が集中し、製作地はおそらく京都の工房で、注文生産で作られ有力者の手でそれぞれの地に運ばれたと思われる。一般の商品としては流通していなかったのではないだろうか。京都系の手づくね成形の土師器皿の分布といかに重なるか検討が必要であろう。ただし、三嶋大社所蔵の資料は国産ではなく、高麗などからの舶

来品の可能性が高いと考えられる。¹⁹⁾

4 菊花形皿の使用者と同時代の出土遺物

前項で菊花形の皿の所有者層をある程度以上の武家を中心に公家・有力町人と考えたが、実際にお歯黒や紅を入れて化粧をしたのは男性だろうか、女性だろうか。杉山洋氏の指摘するように、化粧道具をもつから即女性と確定するのではなく検討が必要であろう。²⁰⁾ 性別を確定する最も良い資料は墳墓から見つかる人骨と副葬品だが、唯一の墳墓の瑠璃光寺跡遺跡第55号墓では人骨は腐朽し痕跡すらとどめていなかった。他はすべて生活遺構からの出土である。熊野速玉大社へは手箱同様に当時の衣装一式が御神宝として奉納されている。上位の4宮については男神へは男性の衣装と武具が、女神には女性の衣装と機織道具が納められて性別を意識していることが伺えるが、下位の8宮では男神、女神にかかわらず全てやや簡略化された（身分の下がる）²¹⁾ 女性の衣装が画一的に納められている。下位の8宮の画一性が不安ではあるが、上位の4宮で手箱の装飾技法にランクづけがあっても内容品の組合せに差異がないことから、室町時代の初期には男女共に化粧をしていたと思われる。また、江戸時代に入ってから戦国期の思い出話をまとめた「おあん物語」²²⁾ には、合戦で取った敵の首級にお歯黒を施して値打を上げる話が描かれ、この時代までは上層の武士がお歯黒をしていたことがわかる。けれども、江戸時代前期には歯黒道具は婚礼調度の重要な一角を占め、女性のものになってしまう。津田紀代氏によれば、江戸時代にお歯黒をしていたのは、公家の男女・武家の女性・一般庶民の女性・遊女の一部に限られる²³⁾ であろう。中世から近世への変革期にお歯黒は男性に不必要とされ急激に忘れ去られ、女性のみ風習が伝えられたのだろう。おそらく紅をさすことを含めた一連の化粧の行為も、この時点に男性の手を離れたと思われる。逆に室町時代の菊花形の皿は、使用者は男女ともに使った可能性があり、単純に一方が使ったとは言い切れない。あえて言えば、武家社会のハレの日＝合戦の舞台に臨む時に男性が、婚礼の時に女性が使用したと考えるのが一番無理がないかもしれない。

同時代の化粧用の器の出土例は、鎌倉市内の遺跡では、紅が付着した瀬戸の入子の花形の皿が見つ²⁴⁾ けている。一乗谷朝倉氏遺跡で紺屋と推定される地点の埋め甕（第35次調査SX1386の8号甕）から、青白磁の浅い菊形の紅皿が3枚見²⁵⁾ つかり、共伴資料に青花磁器や12枚セットの白磁菊皿があり、15世紀後半から16世紀前葉のものと考えられる。広島県福山市の草戸千軒町遺跡では、青磁の紅皿と銀製のお歯黒用と²⁶⁾ 考えられる皿が入子の状態で井戸（SE1560）の底から見つ²⁶⁾ けている。お歯黒皿は5葉複弁の輪花で、鋳造品である

う。室町時代初め～中頃の草戸千軒町遺跡II期後半にあたる。また、小谷城跡の銅製のやや大形の5弁の輪花の碗はお歯黒用と考えられる。製作技法は菊花形の皿と同じく、坏と高台を鋸留めし、鋸にはオシベを波形の放射状に線彫りする。これらのお歯黒用の金属製の器は、平安時代後期の『類聚雑要抄』に書かれた、歯黒目は銀製の5葉入角で径2寸7分（口径約8.2cm）の記述²⁷⁾にほぼなっており、更に初音の調度²⁸⁾など江戸時代の婚礼調度に含まれるお歯黒道具の碗に伝えている。ちなみに同書には、水入れは銀製の6花形で径2寸2分、頬紅入れは銀製の6花形で径2寸6分と記されている。

このように、意外にも室町時代になっても平安時代以来の形を伝えている部分もあることから、菊花型の皿の出現は、化粧という公家社会の習慣を取り入れながらも、一方では全てを倣わず対抗しようとする武家社会の意識の現れとも考えられる。

5 化粧道具のセットからみた菊花形の皿

化粧に使う道具は、化粧の内容により時代とともに変化し続けている。実用を主とした道具は、貴族階級で美の追求及び嗜みとしての化粧が行われ始める平安時代に入り確認できる。自分で化粧をする以上顔を見るための鏡が不可欠で、他に白粉や紅などを入れる器、髭や髪を整える道具、整理のための箱など必要である。けれども何が幾つあればセットとみなされるか化粧行為の内容で決まりなかなか決定できない。特に鏡や櫛は祭祀遺物として古墳、井戸、経塚に多く埋納され、単独の出土ではその意味はわからない。しかし、これらの遺構からの出土遺物であっても、黛（眉墨）や提子（お歯黒用）などと一括で出土する場合は化粧用具としての性格が強いと思われる。化粧道具の良好なセットは、平安時代には墳墓を中心に出土例もあるが、鎌倉時代以降は伝世品が中心になる。火葬の増加と、墓への副葬に対する意識の変化によるものかもしれない。時代ごとの主な例を次に掲げ、特徴をつかみたい。

平安時代では、10世紀の平安京右京三条三坊の木棺墓²⁹⁾ SX46で漆皮の盆に載せた合子・毛抜・髪搔・漆皿と、同一墓境内から和鏡・須恵器壺・黒色土器・土師器皿が見つかった。12世紀の福岡市七反田遺跡土壙墓SK-01³⁰⁾では、和鏡と漆塗鏡箱・合子・刀子、木箱に収めたとされる毛抜・白磁皿・白磁碗・土師器皿が、福岡市博多遺跡群第683土壙墓³¹⁾では懸子をもつ漆塗の手箱から和鏡・櫛・櫛払・鉢・毛抜・刷毛、小壺・水引と、棺外から青磁碗・青磁皿・土師器皿・土師器坏が見つかった。和歌山県田辺市高尾山経塚第2号経塚³²⁾では、鏡と鏡箱・青白磁合子・青白磁小壺・檜扇・櫛・黛・敷紙が、京都市稻荷山経塚³³⁾では和鏡・青白磁合子・青白磁小壺・輪花白磁皿・銀製合子・銀製提子・輪花土師皿

が見つかっている。これらの遺物の共通点は、鏡、青白磁の合子や蓋付き小壺、輸入陶磁器の皿や碗をもち、鋏をもたないことである。鋏の用途ははっきりしないが、博多遺跡群第683土壙墓は合子がないこと、鋏をもつことからやや後出するものかもしれない。

鎌倉時代では、江戸時代の『新編相模国風土記稿』にスケッチされた鶴岡八幡宮旧蔵の籬菊螺鈿時絵手箱³⁴⁾に硯、鏡と鏡箱、方形および円形の小箱、櫛と櫛払、銀製の合子2個が、三嶋大社所蔵の梅時絵手箱に鏡と鏡箱・薰物箱・齒黒箱・白粉箱・菊花形皿・鋏・毛抜・髪搔・紅筆・眉作・櫛・元結が含まれる。13世紀前半と考えられる兵庫県多利・前田遺跡土壙墓SK-01³⁵⁾では、和鏡・青白磁小壺・青白磁合子身・白磁小皿・鋏・毛抜・刀子が出土している。これらの遺物の共通点は鏡、鋏・毛抜・髪搔をもつこと、小壺をもたないことである。大分県日田市宮ノ原遺跡の土壙墓³⁶⁾は湖州鏡・青白磁合子・鉛製の紅皿・鋏をもつ。伝世品の2点は薰物箱、齒黒箱、白粉箱などの小箱が組み合わされ、新しい収納用品が登場する。

室町時代では伝世品に限られ、熊野速玉大社の資料が鏡と鏡箱・薰物箱・齒黒箱・白粉箱、花形皿3個・紅用茶碗・髪搔・耳搔・眉作・鋏・毛抜・櫛と櫛払いと櫛箱が組み合わされている。

ところで、最初に述べたように菊花形の皿の系譜は、熊野速玉大社所蔵の手箱群から三嶋大社所蔵の梅時絵手箱の菊花形の皿へと遡れる。鎌倉時代初期の作と伝えられる菊籬螺鈿時絵手箱は硯も含むが化粧道具箱とするならば、2個の銀製合子へ更に遡れる可能性が考えられる。1つは4葉の花形で、1つが菊花形を呈し大きさは口径6.5cm余りである。銀製合子は京都市伏見区稲荷山経塚出土遺物へつながると考えられる。稲荷山経塚出土の銀製合子は口径4.9cmで、青白磁の合子と全く同一規格であり、菊花形の皿はつまるところ経塚出土の青白磁の合子につながると考えられる。経塚出土の青白磁の合子には、ガラス玉などの玉類、砂金、抹香を入れた例が³⁷⁾数例あるが何が入っていたかはっきりせず、大部分は残存している遺物や付着物は確認されていない。小松大秀氏は合子の用途を特定できないとしながらも、内容品の良く揃っている手箱に合子が含まれないことから菊花型の皿が合子と同じ様な役割をしていたのではと推定されている³⁸⁾。けれども、むしろ薰物箱、齒黒箱、白粉箱などの小箱の出現が、合子の消長とより強い関係をもっているのではないだろうか。青白磁の合子や小壺は蓋付きで、内容物の保存ができる点が特徴であり、菊花型の皿の一時的に液体を溶くための用途とは異なっていたと思われる。漆器の小形収納容器が広まるにつれ、保存のための青白磁の合子や小壺が不必要となり、菊座をもつ合子から溶

化粧道具のセットからみた菊花形の皿

くための容器に菊花の形を引き継いだのではないだろうか。ならば合子が消滅しても皿、碗、坏が残ればよいもので、菊花形の皿が出現する要因ははっきりしない。三嶋大社所蔵の資料に見られるように、朝鮮半島からなど外来の文化の影響が多分にあったと思われる。経塚出土の青白磁の合子は、1個だけ副納されるのが半数以

Tab. 7 化粧道具の中でのお歯黒皿・紅皿

	陶 磁 器	金 属 製 菊 花	金 属 製 輪 花
10世紀	平安京右京三条三坊 合子		
11世紀	保存のための容器		
12世紀	七反田遺跡土壙墓 合子 博多遺跡群土壙墓 小壺 高尾山2号経塚 合子・小壺 多利・前田遺跡 合子・小壺	稻荷山経塚 銀製合子 菊籠螺鈿時給手箱 銀製合子 三嶋大社梅時給手箱 銀製菊皿	『類聚雜要抄』 紅・銀六花皿、水・銀六花皿 齒黒-銀五葉入角皿
13世紀			朝日宮ノ原遺跡土壙墓 鉛皿
14世紀	熊野速玉大社手箱 白磁碗	熊野速玉大社手箱 菊花形皿 一乗谷朝倉氏遺跡第54次815 一乗谷朝倉氏遺跡第46次167 一乗谷朝倉氏遺跡第50次252 堺環濠都市遺跡 柳之町	
15世紀	草戸千軒町遺跡 白磁碗		草戸千軒町遺跡 銀五花皿
16世紀	一乗谷朝倉氏遺跡 白磁皿	一乗谷朝倉氏遺跡第40次36 琉璃光寺跡遺跡 菊花形皿 小谷城跡	小谷城跡 銅五花碗
17世紀			初音の調度 金五花碗

上だが、3個以上では、合子が3の倍数個または合子が3の倍数個+小壺1~2個の埋納をしている例が多い。広島県宮島町の厳島神社経塚³⁹⁾などで発見された合子内に小皿をもつものは小皿3個である。場合によっては中身を入れたつもりで形だけ埋納することも考えられるが、基本的に3種類の物質をそれぞれ青白磁の合子に入れて埋納したのではないだろうか。平安時代の白粉の原料は米粉もあったが鉛や水銀などの重金属が主で腐朽は考えられず、経塚副納の合子にはおそらく入れられなかったのだろう。けれども、この3個1組の合子が熊野速玉大社所蔵の手箱群の3枚の菊花型の皿に影響を与えたと考えられる。手箱には紅用の白磁碗が組み合わされているが、同型の菊花型の皿にしても使い勝手はいっこうに構わず、紅およびお歯黒は使用時には酢を使い銹化の点でも変わりはないはずで

ある。それなのにあえて異なる素材の器を使用するのは、『類聚雑要抄』の3個1組の菊花形皿だけでなく、経塚副納の合子にもその祖形が求められるであろう。

6 おわりに

化粧道具の変遷は、単なる風俗面での影響だけでなく、化粧を行い得る階層や時を選ぶため、社会全体の画期と強く結びついている。つまり、平安時代から鎌倉時代への過渡期に合子から漆器の小箱へ保存容器が変わり、菊花形の皿の原型が出現する。そして、同じ武家社会の中でも鎌倉から京都へ政治の中心が移った室町時代初期に典型的な菊花形の皿が出現する。

できる限り実用の道具で人々の生活の中での使用から考えてみたが、いずれ生産や流通、経塚出土遺物や埋納鏡などの祭祀遺物も含め考えてなおしてみたい。

また、江戸時代の伊万里系をはじめとする近世の紅皿は、山口大学構内でも3点見つ⁴⁰⁾かっているが、これらと金属製の菊花形の皿と接点を見つけることができなかった。商品の器として大量生産・大量消費で全国に広まっているが主体は口紅であり、かなり次元を異にしていると思われる。こちらもいずれ考えていきたい。

資料の実見、写真の掲載に当たっては、福井県立朝倉氏遺跡資料館の水野和雄氏、滋賀県湖北町教育委員会の山崎清和氏、大手前女子学園文化財調査室の藤本史子氏、山口市教育委員会にお世話になりました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

[注]

- 1) 山口市教育委員会『瑠璃光寺跡遺跡』（1989年）。
- 2) 鈴木敬三「熊野速玉大社の御神室」（『國學院雑誌』第65巻第10・11号、國學院大学、1964年）。
- 3) 熱田神宮『特別展「日本の装い」-風俗に文化を探る-』（1987年）。
東京国立博物館『日本国宝展』（読売新聞社、1990年）。
- 4) 小松大秀編『日本の美術No.275 化粧道具』（至文堂、1989年）。
- 5) 福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告II第10・11次・第54次調査』（1989年）。
- 6) 福井県立朝倉氏遺跡資料館『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡XV-昭和58年度発掘調査整備事業概報-』（1985年）。
- 7) 福井県立朝倉氏遺跡資料館『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡XVI-昭和59年度発掘調査整備事業概報-』（1986年）。
- 8) 堺・柳之町遺跡調査会『堺-柳之町』（大手前女子学園考古資料室、1989年）。

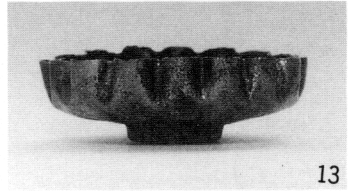
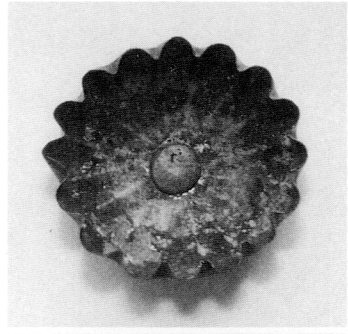
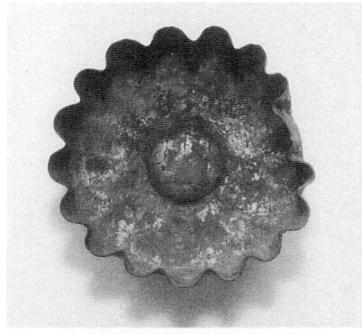
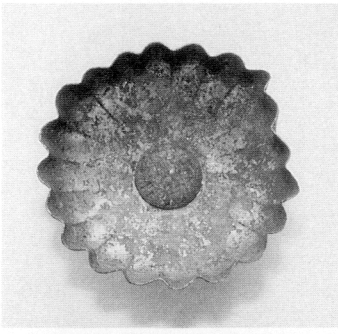
注

- 9) 福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡XIII－昭和56年度発掘調査整備事業概要－』（1983年）。
- 10) 福井県立朝倉氏遺跡資料館にて実見。
- 11) 小松大秀「大山祇神社蔵 菊枝鳥蒔絵手箱について」（『MUSEUM』No.483、東京国立博物館、1991年）。
- 12) 前掲注9）。
- 13) 前掲注9）。
- 14) 福井県立朝倉氏遺跡資料館『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡XVII－昭和60年度発掘調査整備事業概要－』（1987年）。
- 15) 湖北町教育委員会・小谷城保勝会『史跡 小谷城－浅井氏三代の城郭と城下町－』（1988年）。
- 16) 湖北町教育委員会にて実見。
- 17) 前掲注2）。
- 18) 堺環濠都市遺跡SKT61地点、や堺環濠都市遺跡SKT289地点からの出土があるが、損傷が著しい。堺市教育委員会「堺環濠都市遺跡発掘調査報告－車之町東1丁 SKT61地点－」（『堺市文化財調査報告第23集』、1985年）。
堺市教育委員会「－SKT289地点：堺市中之町西2丁17－」（『堺環濠都市遺跡調査概要報告』、1991年）。
- 19) ポストン美術館の所蔵する高麗の銀製の仏具の中に、脚部の細工のよく似た承盤が見られる。
大阪市立東洋陶磁美術館『朝鮮陶磁シリーズ16 高麗の金属器と陶磁器』（1991年）。
- 20) 杉山洋「「今様の鏡」と「古躰の鏡」－出土八稜鏡より見た平安時代の鏡－」（『MUSEUM』No.481、東京国立博物館、1991年）。
- 21) 前掲注2）。
- 22) 毛利博物館『特別展 毛利氏の女性』（1991年）。
- 23) 津田紀代「化粧と装い」（小松大秀編『日本の美術No.275 化粧道具』、至文堂、1989年）。
- 24) 前掲注4）。
- 25) 福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡XI－昭和54年度発掘調査整備事業概報－』（1981年）。
- 26) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡 第24～26次発掘調査概要』（1980年）。
- 27) 郷家忠臣『箱 工芸文化史の断層』（毎日新聞社、1988年）。
- 28) 日本放送出版協会『NHK徳川美術館① 奥道具の華～源氏物語絵巻と初音の調度～』（1989年）。

化粧に用いる金属製の菊花形の皿

- 29) (財)京都市埋蔵文化財研究所『平安京右京三条三坊』(1990年)。
- 30) 福岡市教育委員会『都地・七反田遺跡』(1990年)。
- 31) 福岡市教育委員会『都市計画道路博多駅築港線埋蔵文化財調査報告(II) 博多』(1988年)。
- 32) 前掲注4)。
- 33) 前掲注4)。
- 34) 『新編相模国風土記稿』の挿図が郷家忠臣著『箱 工芸文化史の断層』(毎日新聞社、1988年)に掲載されている。
- 35) 加古千恵子・平田博幸「多利・前田遺跡発見の中世土壙墓」(『考古学雑誌』第74巻第4号、日本考古学会、1989年)。
- 36) 土屋和幸・友岡信彦「日田市朝日宮ノ原遺跡の中世墓壙」(『おおいた考古』第2集、大分県考古学会、1989年)。
- 37) 田中巳貴「経塚出土の青白磁合子—その蓋表面の文様とわが国への影響—」(『MUSEUM』No238、東京国立博物館、1971年)。
- 38) 前掲注4)。
- 39) 広島県立歴史博物館『瀬戸内の中国陶磁』(1991年)。
- 40) 吉田構内本部2号館敷地、山口市石観音町職員宿舎から出土している。
山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VIII』、1990年)。
山口大学埋蔵文化財資料館「人文・理学部7号職員宿舎公共下水道切替に伴う立会調査」(本書79ページ)。

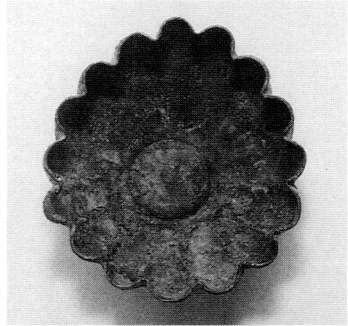
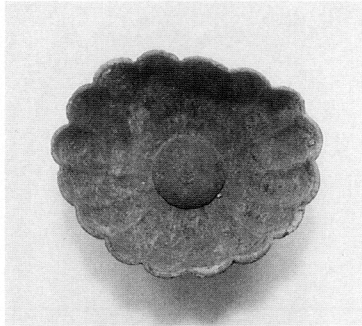
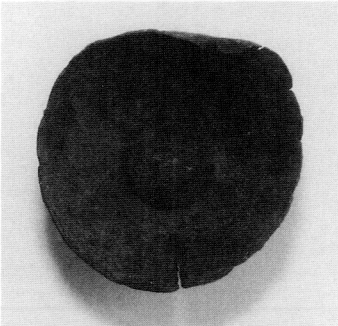
化粧に用いる金属製の菊花形の皿



6

8

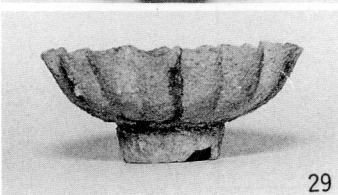
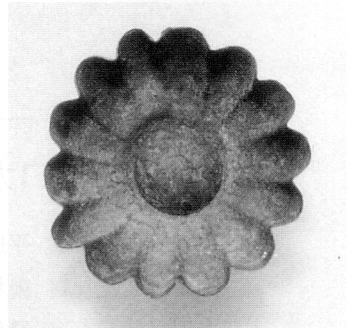
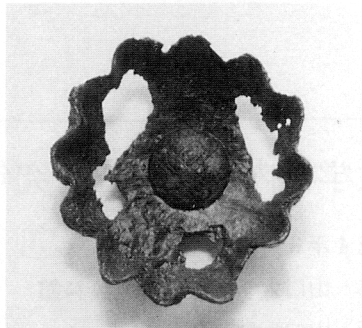
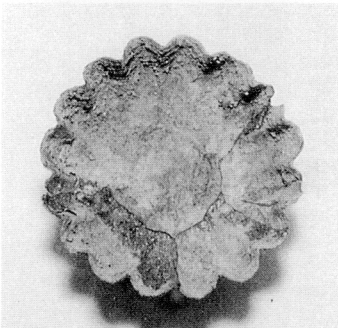
13



25

10

12



29

18

11